

憲法九条を守る理由は一つ「戦争がいやだから」

憲法をナゼ
変える必要があるのか？

西山町礼拝 権田 康夫

今の憲法で戦争をやっていないのに何が問題なのだろう？

特に九条は文面は長くもないが、それによって戦争に参加してこなかった。最近国際貢献と言って、戦闘行為に参加することが正しいかのごとく言う人もいるが、その様な事を言う人は自ら戦闘の最前線で戦うのだろうか？

必要と思うなら外人部隊として個人参加したら良いのでは？とさえ思う。

さらに、戦争、紛争で自らの血を流すだけなら認めなくてもいいが、そこには敵という存在する人を殺す事が目的なら、許されない。

侵略者から守る為に戦うのはやぶさかではないが、それ以前に平和的關係を作る努力をそれこそ血のにじむ思いでやらないと。自分と主義、主張の違う者を排除するのは愚者のやることである。平和とは多種多様なものが共存することである。九条は最低限の愚行を防いでくれていると思うから、守らないといけない。

親友。パソコン

西山町別山 店橋 正英

先日小学校時代の同級会常任幹事B君から「米寿の会」を開こうと言う案内状が届いた。米寿に因んで「パーティー」と景気よく最後の同級会を開こうと言うのである。

思えば小学校以来の長い人生で多くの友人・知人と出逢い、別れて来たが、

最近の新しい出会いにパソコンがある。この新友は聞けば何でも嫌とは言わないで丁寧に教えてくれる良き師であり、気さくな仲間の話し合いの場でもある。話し合いとは言ってもメールの交換なので、打字を正確・迅速に打つことが求められるが、この練習台として私は「君が代」「百人一首」を使ってきたが、仲間の一人に「憲法前文で練習した」と聞かされ、「それは良い」と気づき、前文を3区分に分けて練習を始め、一ヶ月になる。未だ暗記は出来てないが、せめて此の前文くらいは暗誦出来るようになりたいものである。

雑感

西山町別山 寺澤 健二郎

一九四五（昭和二十）年頃までの戦争は、前線と銃後がハッキリと区別することができた。

然し核兵器が出現し、運搬手段と誘導技術の進歩により、全世界を射程圏内にすることが可能になった。ミサイルをセットし発射ボタンを押せば、諸元通りに飛翔し途中障害物があっても、それを迂回して目標に命中するようになった。

今では隠れる所はないと云われている。米国とロシアの核兵器を合計すると地球を三回も破壊することが可能な質と量だと云う。一発のミサイルが撃ち込まれると三十分位の時間差で核攻撃の応酬が繰り返され、想像を絶する惨状になるだろう。

地球の破滅であり生物の滅亡である。加えて核爆発による放射能を帯びた粉塵が大気圏から宇宙まで拡散し太陽光を遮り氷河期の地球になるだろう。戦争を知らない元氣溢れる若人達が「やられたら、やり返せ」と叫んでも、そう簡単に応じることは出来兼ねる。

短歌 戦争の回想

西山町妙法寺 戸次 法子

1、兄征きて帰らぬ報せの悲しみに声音しづめて闇に泣く母

（戦死者の家を誉れの家と讃えられるが故人前に悲しみを現す事の出来ない。）

2、「男の子産みたくない」と新妻の洩らしたる声
耳の底ひに
（男は必ず兵になる、それを恐れての言葉が今も耳の奥に残っている。）

3、「勝つまでは」の声に急かされ軍服縫う女子挺身隊の青春ななりしを
（軍服と同色の服を身に包み汗にまみれた青春であった。）

4、戦争の悲話の真実を伝へつつ歴史問題孫と語りぬ
（戦争の怖さ愚かさを、ともすれば曲げられてゆく歴史に真実の戦争の悲惨さを若者に伝えてゆきたい。）

5、外つ国に誇れる憲法九条あり重なる思ひが友の歌集に
（憲法改正の動きの世に平和を願ふ九条を守りたい。）

九条を護ろう

西山町石地 松井 清

今も世界各地で紛争や内戦があり、多くの人命財産が日々失われている。

わが日本も日清日露の明治から世界大戦の昭和まで、五十有余年に亘り幾多の戦争が続き、数百万人の尊い命の犠牲と、筆舌に尽くせぬ国土崩壊の惨禍をもたらしたが、終戦以来今日まで六十余年の間、複雑で困難な国際情勢の中で平和を保ち得ているのは戦争放棄を謳った憲法九条に因ると思う。

このことは世界に類をみない日本の誇りであり、かえがたい大きな犠牲により得た日本人の宝であり、世界平和に対する最大の規範と言える。私達悲惨な戦争体験者は五月三日の憲法記念日にあたり、皆さんと共に九条を守る誓いを新たにしたいものである。

偶感

西山町別山 山崎 善一

我が家では最近の中越沖地震で、建物は半壊となり、ガス・水道・電気・トイレ等が使えなくて、大変不便な生活を過ごして来ましたが、国・県を初め全国各地の方々から多くの温かい支援を頂き、災害復旧に当たって来ました。現在は目標の八割くらい迄完成し、皆様の御陰と深く感謝しております。日常生活が苦しくなると思いつのが太平洋戦争当時の生活です。昭和十二年中国との戦いが太平洋戦争に発展、政府は軍需品の生産を最優先とし、国家予算の殆どが軍事費に充てられた。そのため国民の生活物資は極度に少なくなり、特に食生活は厳しく苦しい年月が続いた。昭和二十年八月、日本政府は力尽きて降伏したが、その後も国土の復興には随分長い年月を要し、戦争とは震災のように短日月で終わらないものだと思惑した。人類は長い歴史を通して戦争は飽くまでも避け、平和な社会造りに力を出し合わねばならない

「大和撫子」が九条を守る。

西山町長峰 山田 信

四年前自民党はその政権公約として、憲法改正草案を公表し、第九條の戦争放棄と軍備及び交戦権の否定を削除し軍隊の保有を明確に規定した。

戦争を体験した者の一人として、私はこの改正案から、赤紙招集で三百万人近い兵士が戦場に入り出され、戦死した徴兵制の復活を予測せざるを得ない。夫や子供、恋人を戦場へと表面は歓呼をもって送り出した当時の婦人の心は如何ばかりであったか。「怒り、悲しみ、苦しみ」正に筆舌に尽くし難い狂人のように葛藤の日々を送られたことであろう。

そしてこれらの人々には、徴兵制をめざす九条の改正に対し、命を賭しても反対を貫く決意を新たにしているに違いない。

私はこのような人々と深く連携し、九条を守る西山の会が、地道に着実に謙虚に、ねばり強く地域活動を進めていくことを願うものである。

一人が何もかもを

変えることなどできないけれど

一人に出来る何かから

世界は変わっていく